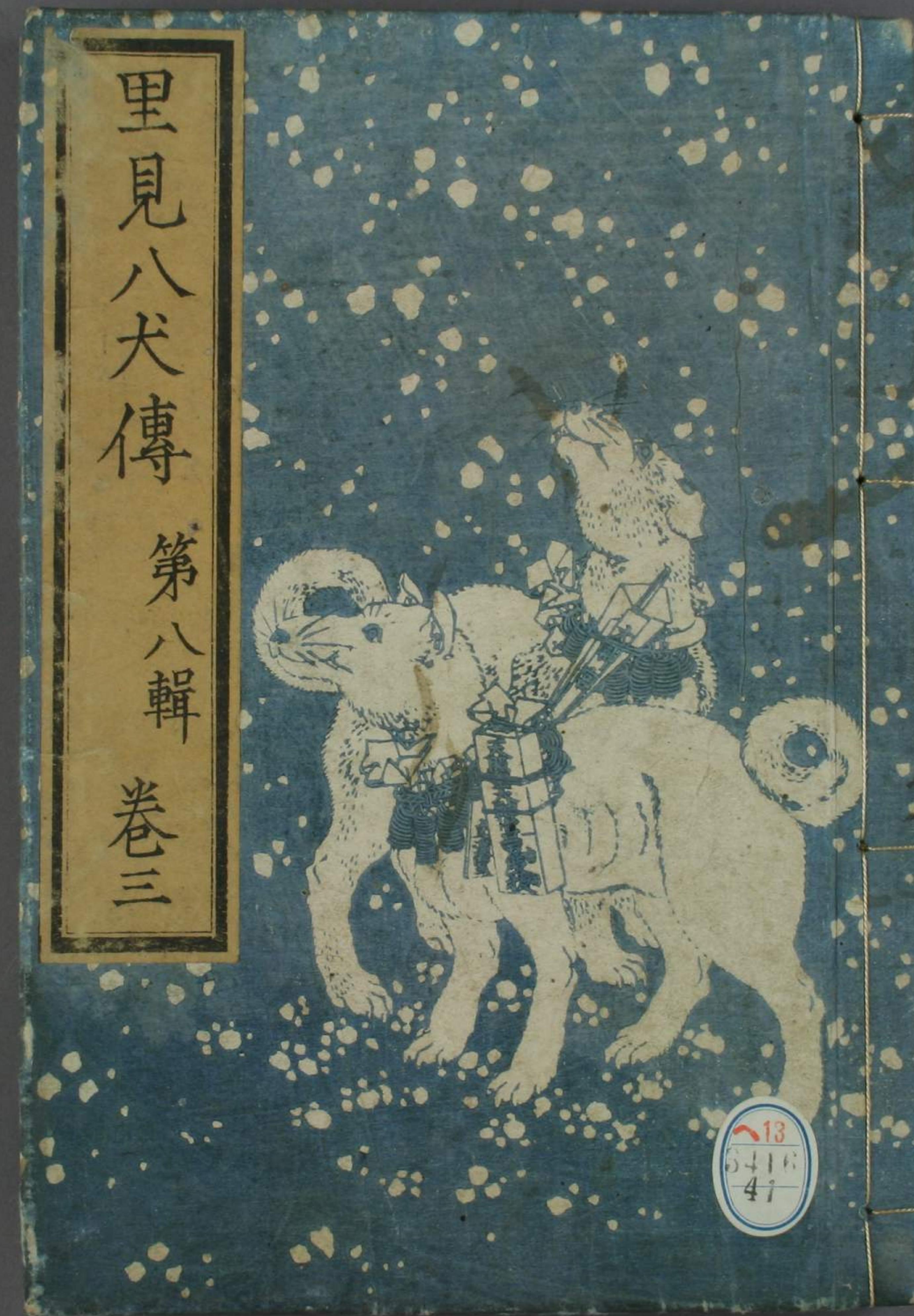


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



八編も表之内

二

松野
勝喜院

南總里見八大傳第八輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第七十回 北母自賞罰を恣ふ

東使雙首級を賜ふ

復説莊介小文五口の天士功ありまく賞をあき。稻戸津衛謀られて。矢庭が捕らえ
る。俱ふ怒る声高す。蓬たる執事由允。俺们倘罪あふ先あうと詮議て。禁獄を死
ゆふ。一言隻々句もぞの美き。誰引を莫勢か。よし籠せし甚麻る故に。武士未似ば
れ鄙怯の舉動。その情由ゆんのうをと。敵圍に罵る勇士の憤激乱。長髮逆立。綱
縛の索めかづる。斷じたる怨の眼光飛ひ。蒐ると力士們の舌と掉ひ。穴縫ふ怕れ。ひそ
取縮す。登時津衛由允ハ憶む。嘆息の貌を改め恭り。天士うち對ひ。事情を告
げ。怨もり。理のぬ。あく其の本意ふあく。便是。寡君景春の女母公簾殿の處

分付され。先やその意を説示され。怒と治りて听ね。柳寡君景春公の二箇の丸女弟あり。皆是足軒大刀自御前の丸腹也。御鐘愛浅く。第一の丸女弟。武藏州豊嶋郡大塚る。大石左衛門尉憲儀王。憲儀子小妻せられて大塚殿と稱へ。長尾白石大石小幡。原憲実管領の四家老也。共不掎角の勢あり。又次のかな女衆。兵庫州同郡石濱の城主。千葉。千葉自胤主の内室也。船場殿と稱ら。柳寡君への車也。兩管領。扇谷と不和の後。大石千葉の両雄も。互に志を運れて。當家の御方。それより五個年前。和殿们が大塚也。法場と闘せ。折大石殿の家臣。軍木五倍。三般上社平。卒川菴。ハと初々と。轂され。難兵歟。而。剣戸田河の頭。陣番丁田町進。戦役の發え。ある。そ。折属役仁田山五百。轂。捕をと。風声あり。大士。通て假首級也。実力二尺八。と。喚。做。た。俠者。弟兄。争ひ。當時。大石殿。ちよ。報あり。大刀自御前も知食る。又。只今。は。取。も。大田生。ハ。次の年。石濱の城内。且。開野。うち。假少女。千葉の

家臣馬加大記。子鞍弥吾。従類。も。來。皆。轂。夜。艾。竊。且。開野。と。相。資。俱。逐電。を。す。す。這。義。も。亦。船場殿。よ。兒。母。公。倭。と。死。消息。あ。ー。ク。が。よ。さ。き。這。里。も。少。え。る。余。よ。今。番。和。殿。們。が。小。千。谷。御。客。店。也。酒。顛。二。と。喚。做。る。は。夜。入。の。強。盜。支。黨。も。一。箇。も。漏。き。轂。捕。る。を。締。の。趣。と。那。御。長。が。少。え。あ。ざ。る。は。件。の。訴。状。と。大。刀。自。御。前。の。裔。と。這。大。田。小。文。吾。と。ふ。浮。浪。人。い。曩。裏。ふ。武。藏。の。大。塚。也。同。惡。の。の。西。三。名。と。兵。侶。ふ。大。石。家。の。陣。番。属。役。幾。名。う。射。て。殺。と。額。藏。う。罪。金。奪。去。う。癖。者。ふ。後。又。石。濱。也。馬。加。大。記。が。轂。れ。折。も。惡。少。年。と。相。資。て。逐。電。あ。る。の。ぞ。か。入。這。大。川。莊。介。と。旅。人。の。必。件。の。額。藏。う。ん。御。高。は。大。石。殿。の。使。テ。仁。田。山。晋。五。づ。來。つ。る。折。那。大。士。う。唱。る。惡。黨。の。ゆ。を。詔。呼。一。晋。五。答。て。さ。ば。那。罪。人。額。藏。を。當。日。同。類。の。資。助。あ。よ。と。法。度。と。犯。と。逃。亡。る。そ。後。大。川。莊。介。と。姓。名。を。更。め。諸。國。と。偏。歷。あ。づ。よ。世。の。風。声。ふ。少。え。る。在。下。ゲ。那。折。ふ。轂。捕。る。も。同。類。え。ど。大。塚。大。飼。大。田。も。ど。

喰做をひき。力二尺八と東兄弟の俠客でひり。其頭の穿鑿金の届う。梶首の
名字相違せ。主君の咎を蒙り。面目喪ひ。是よりの後那奴们が跡見れるがゆ
え。捕をも。今より便をね。朽木に朽木。とひく。庄介の額藏をあ
疑ひ。任せ。他們が強盜を。轂す。ひそかに功をはあね。苟且の小事。縱他們がよ
借らざ。這里下り。捕を遣し。捕を。繩を奪れど。奮毅數を去る。當夜の挙に。領主の與をせり。非如舊惡あらず。
纏を奪れど。奮毅數を遣し。小文吾の手の盤
不^可
賞する不足を感めた。况五逆の罪人。其の差を許され。速く召捕。小文吾と石
濱へ。莊介の大塚へ牽渡し。遣し。那首の法度を儘へ。咱兩箇の愛媛。堺の家風正
く。武威耀る。隣国までも。怡れべ。忽諸ふと走らせる。後悔其首を立かず。快々
准備をせよ。と亦他吉も。仰ぐ。某諫め稟を。御談が外も。那額藏を喰れ
事。兄弟大塚犬飼大里。喰做を勇士西三名。竊不あの差を知。憤れ。訴ふ。所
が。已と。法場を開く。必死の友を拯ひ。世の風声ふるえ。あく。簸上軍本
黨一由さ。不敷され。奸邪知。致を所。自業自得を。欲ある年脚主君大石殿。在
籠倉す。然も亦分明。よく玉石を辨。氣を。又日開野と
公。女田樂。大阪毛野胤智。と喰做を。智勇の少年。他則千葉の老黨栗飯原
首胤度。妾腹の獨子也。胤度一家謫死の後。相模州足柄郡。大阪村を生れ
る。ち。人として正可。然びて。あれ。大阪毛野。馬加一家を。裏せ。ひそかに。親の為胞
兄弟の為怨を復せ。又那馬加常武。則千葉家北逆臣。當時を。發

當坐ふ。死を。身の私曲を。アリ。簸上宮六の弟社平。并木卒川菴八門と謀
合し。額藏。盜見を。誣う。陣番丁田町進。簸上軍本首脳。虚実によ
り分明。故不額藏。冤屈の罪不落されて。既ふ死刑を決り。那額藏の義
兄弟大塚犬飼大里。喰做を勇士西三名。竊不あの差を。憤れ。訴ふ。
事。兄弟大塚犬飼大里。喰做を勇士西三名。竊不あの差を。憤れ。訴ふ。
が。已と。法場を開く。必死の友を拯ひ。世の風声ふるえ。あく。簸上軍本
黨一由さ。不敷され。奸邪知。致を所。自業自得を。欲ある年脚主君大石殿。在
籠倉す。然も亦分明。よく玉石を辨。氣を。又日開野と
公。女田樂。大阪毛野胤智。と喰做を。智勇の少年。他則千葉の老黨栗飯原
首胤度。妾腹の獨子也。胤度一家謫死の後。相模州足柄郡。大阪村を生れ
る。ち。人として正可。然びて。あれ。大阪毛野。馬加一家を。裏せ。ひそかに。親の為胞
兄弟の為怨を復せ。又那馬加常武。則千葉家北逆臣。當時を。發

覺れ。死後不至そひのあれも。石濱殿自御と後を知召すもあまく。下情受
く上不通候。左右不敷と造り。故築月の明月も浮雲れと掩ふ如。矧大田小
文五景。石濱の城小畠あらね。馬加大記の奸計也。あれも亦石濱殿の脚本意也。か
矣。大田小文五景。天阪毛野の資もよて。那城内と脱去マリ。その身を安くせむぞ。悪心も
故あやし。臣裏裏小関東へ。使と奉と。大塚石濱の西城内。四十五日逗留。折
々ある人々の夜話より。初て傍聴する趣の方如。おの淺縁那莊久。舊名額藏
とも憎せぬが如。よそは小文五景。石濱殿と對一あり。野心あり。されど。
臣件の三天士の今番衆賊と較る。捕る武勇の極たと。是れ。またもれまえ。ざつう
士さん。顧み礼と厚く。多く高禄と死給れ。間もて御家臣ふゆ。他們も亦恩を感
む。忠義のああ死むを辞せ。堅を破り銳を劈く。軍功きいあく。然事と云ひ是公
私の大辛。當家の重宝のう。最憚む。千慮も一失無をあはば。只穩便の

丸沙汰を。あくまで欲しみと辭を盡。理と演て。直言數刻。及びが。良葉只不苦一
えん。壁言喻べ。五景。大刀自御前。皆も果たれ氣色變。そ曲承機遣。危と睨。やされ
由充何う。せ流の主をと侮りて。歎指揮。乍ら似而非談。義然たる。知らず。綏莊
众小文五景。人素より惡意。犯る。法度を犯。有司を害。て法場を鬧せ。と。不
を。罪ふ。あくまで。允さ。今より下。下と。上と犯。惡意も。律令。畜。法度廢れ。國治。時
より。備身せ。流よ。あされ。武威東北。掲正。而。兩官領も。憚ら。長尾景春。娶
か。今景春。ハ東国。不在。備見の。田守。預り。多。大石千葉の女婚達。與罪人を捕
へ。川民是より悔り。景春の武威衰へ。恩禄。お身。不足。食。主君。言。易て。那
罪人们。首取。惜。由充汝。ハ不忠の臣。不忠の臣。謀。然。でも拒む。歎。諫。欲。ふ。不
敢。園。お臂近。措。護身。力。食。抗。勢。烈。く。え。を。せ。め。諫。り。く。聽。五女儀の
臆。出。ひま。そ。無。と。お。づ。く。些。騒。稍。平。伏。頭。抬。然。ま。思。召。あ。又

何のをう稟毛を御談は儘とて二天士を擱捕てありせん。されば其人小文吉ハ萬夫無當の勇士也大勢もとも向よ。撃きぬる事か。あの義へひ仕らと眞せば大刀自沈吟ど智者千慮も咲素術。他們が衆賊を數々捕る功を賞め招寄せて。帷幕之内に力士置を不意に起て換へ捕捕ると易から。努力洩れとぞせよ。と送る方多く示す。某云々奉り宿所は退く配りあく。僕のとて不謀り。大刀自沉前ひひろ雄をも。封内の訴訟。听々改事多々。今は初夏ニ至る。這義もあて。その理不稱を。且た油汰矣。某は某臣にて君を蔑む方をけられ。非法と知り。詭の計を行ひ。景春當所。在て。縛。惣海位の。是幸あれ。當家の與も不棄へ。造里より密使をもわせ。と主君。庄至。票生も。景春は。母君。太孝。猶。はせば。今。は。遣。議。を。制。め。各。位。を。助。よ。と。仰。ま。る。あ。左。ても。右。ても。勇士の微運。故。は。由。ゆ。き。る。大厄難と争。何。せ。只是。その命運。を。

此諦め。下と理。迫。而。良。臣。の。尉。め。難。理。非。明。辨。是。公。怒。怨。操。俱。二。天。士。恨。も。解。せ。今。ゆ。ふ。嘆。息。外。す。り。姑。と。莊。介。小。文。五。ど。え。く。天。田。と。公。道。を。走。れ。も。婦。人。少。稀。勇。敢。智。計。の。年。來。長。尾。殿。の。鋒。亮。強。と。世。の。風。毛。を。さ。と。搗。鬼。火。あ。づ。け。そ。や。も。優。で。有。だ。軌。事。の。忠。信。理。義。明。亮。感。ま。ふ。不。餘。わ。武。六。口。し。る。み。あ。ふ。為。少。そ。死。與。れ。俺。们。既。不。軌。事。と。知。ら。か。お。罪。不。ゆ。づ。と。う。と。う。解。れ。も。聽。れ。づ。ん。便。是。天。き。命。亨。又。何。が。る。争。ふ。命。死。と。侯。の。爲。不。這。身。危。う。せ。れ。て。一。日。も。安。な。と。し。る。が。大阪。毛。野。と。除。く。の。外。の。焼。本。這。里。の。軌。事。也。今。善。人。の。み。死。是。切。て。の。う。き。憾。る。所。は。大。塚。犬。飼。兩。個。の。義。兄。弟。不。環。り。も。あ。す。且。親。兵。衛。と。曳。ひ。單。節。が。存。じ。ま。お。知。り。も。う。大。山。生。す。言。き。ま。い。再。金。是。で。刀。下。の。鬼。と。移。る。と。過。世。甚。麼。業。報。す。心。よ。から。下。よ。や。ね。然。と。歎。く。愚。痴。う。見。い。覺。期。極。め。そ。ひ。と。答。て。俱。は。臆。考。色。み。く。由。充。よ。ろ。ち。對。ひ。言。セ。フ。と。う。教。諭。の。趣。

卷之五

卷之三

至せまうま。とがひや。やうえ。あうとえ。ちき
具ふ美知は。十室の邑ふ忠信也。軌事ぬぐ死知。莫豫。うる俺们。が與ふ冤枉を釋
きも。うち甲斐。今ゆく。又怨む。不測の值偶更ひ。不測の值偶更ひ。と齊
答て。ゆびひ。共。眼と困て。そ。由充云。をうひ。嗟嘆。不堪。左見右見。而連微妙。た勇
吉の覺期。世ふ志氣。あひ。詎。恁。をあひ。今示せ。の俺。が私密談。を洩。一。き。權且
あ身と禁獄。と重て。上の御沙汰。依り。逢。を。も。初。は。限りの別。と。ん。惜。ひ。べ。ど。
縁返。後方。侍。萩野井五郎。と。え。す。そ。罪人。莊介。小文五。而。妾時。一室。閉籠置。を
あの暁。ふ俺。身みづく。獄食。送。遣。和郎。ハ。殿兵们。共。侶。不。繫。一。那。身。成。べ。と
最嚴。吩咐。て。腹心。の。殿兵。兩。名。を。留。て。天士。と。う。成。も。その餘。の。力。士。へ。要。す。と。自身の
暇。と。取。せ。ぶ。大家。退。り。出。よ。け。却。説。あ。詰。朝。稻戸。津衛。由。充。へ。毎。ど。山。庄。と。則
多。あ。が。不。ト。よ。ん。ベ。ホ。ケ。一。く。る。と。り。ひ。と。ら。い。け。ど。ま。か。不。つ。い。ま。あ。れ。ひ
筋。大刀。自。不。昨夜。天士。と。捕。而。獄。全。不。敷。系。一。置。る。よ。と。具。よ。少。え。あ。ひ。大刀。自。放。放
斜。京。あ。ひ。配。と。稱。功。と。譽。で。あ。ひ。件。の。罪。人們。へ。生。拘。る。伏。大塚。と。石。濱。の。城。牽

たびの食も物足りず。死囚牢獄あきらめ。他の罪人一所不措ぎ。苦と必よりいきけむ。獄舎入りの日より。兩人共に声嗄れ。ひのきのみうざれ。あおがち。獄卒们も病癪のこがう。所お飲とおふかで。執事不妙えが。醫師と招た湯剂と與て。将息を休まうかる。茶餅の效驗あると。ひそく声へ立づけ。左右を程十五月ハ過去。北国も二伏の暑者熱ふ。勝ざる。時より。國東より女婿達より。署中訪向の使者到来。岳母娘大刀自各。各土官の人情あり。大塚より大石家より。今番の使者ふ立られ。旱裏不戸田河の水中。方二尺余敷まれ。陣番丁田町進の弟。由畔五郎豊実と喚做ひ。又石濱より。千葉家の使者ハ馬加大記常武の妻戸牧の姪。馬加蠅六郎御武也。御武。原ハ千原氏也。自覺の扈從。常武一家敷され。後才小由碌は。只這杜校の三子。千葉家。馬加蠅六郎御武也。那禄半分をあわせて。近習。頭ふまされ。當時常武の没後不及その意。嘆き。稟をあわせ。あれど。他と一

味のない。今や。馬加の苗迹と立あがむ。孝胤主は笑れ。元。御沙汰と願ひ。など頻アふ傾げ。眞似せ。自ら遂己と。堺臣們と評議の後。千原蠅六郎御武。即便常武の迹と。その格式と。升され。那常武の下總。千葉孝胤の近習。ふ。主不叛。正あり。走そ石濱の城。千葉の城の爲体。詳よ演説して。仕へ工を乞。宣せ。漸ふ寵用せられて。竟小人へ過ぐ。飾ること。賢と。自ら是非の間を惑ひ。もの侮。受容する。せいかる故。現小人へ過ぐ。飾ること。賢と。自ら是非の間を惑ひ。消息を。智略もさす。と。知る。の。間詰休題。余程。服大刀目。大塚石濱両所の使者。丁田畔五郎豊実と。馬加蠅六郎御武。身邊近く召寄。兩個の息女達より。まわる。消息を。商て。那里の安否と。詮。却。犬川井介と。大田小文吾と。捕。縛の趣。箇様々と。迷も。説示と。那莊介。大塚より。莊官墓。六年。文吾。惡僕也。主を。罪人。す。由。畔五郎。知。文吾。同類。事件の額藏。奪。ち。又。旦。開野。假。女。



訪問起居東
使謁北母時
歡借公道復
私怨

竊内賈けて馬加大記親子役類と數多る。他所為を考えらる。あはれ當日蠅六郎
がアモセエトアシ。今ゆく具のあも及び。余々他们が連立て。這地に來るに天の冥
罰がアモナリ。執事稻戸津衛よ密山意を示す。奇計と旋ら。捕縛りく
最敗系く。獄全吉の數あれ。前月廿日晚を。豫へ他們を活かす。大塚石
濱の兩城内へ牽遞与え。路遠か。倘中途で。更に來か。悔とも及ぶ
矣。首を刎す。首級を餽る。優柔をあう。と。母守思を易く。九月の間。も。做がれ。以あ
ひ。昨今を黙止する。折ち汝達が主の使と。併同日ふ來みけ。時日を延せ。申斐ある。を
詰う。汝と。られて勇ひ。豊実御武。あり。金俱。ふ雀躍して。有ぐれ。計ひ。大塚石濱
兩主君ゆ。の。爰ど。傍まつた。あらそ。欲びゆ。鳥許が。うひど。件の額藏小文吾を。
主君の法度を犯す。罪戾の。あも。在下们。先代の。與。共。追。主。を。讐。言。敵。ひよ。
然。も。知。ひ。と。折。か。既。使。立。られ。を。首級を。あ。而。起。奇妙の家裏。今。初。

出の。御女儀。稀。武邊の御差配。千萬金の御恩。も。倍。感戴仕。宣足。珍重
珍重と稱。齊一額。どうぞ。その。次。演。大刀自歎。と。笑。け。善の急。と。世話書
い。汝達の太義。翌の朝用。當所。退。と。東武。還れ。既。その。爰。と。見。稻
戸津衛。よ。る。那罪人。と。誅。せ。と。吩咐。れ。程。も。く。頭顱。実。檢。ふ。入れ。金。る。
全。要。時。這里。す。侍。と。津衛。が。お。を。等。と。と。曾。て。脇。て。左。右。る。女房。お。茶。と。看。ゆ。せ。果
子。ま。一。賜。る。恩。御。食。大き。て。出。る。浩祭。一個の女房。目。今。津衛。が出。仕。と。お。次。房
太。ま。う。と。稟。は。を。大。刀。自。歎。と。領。を。お。俟。不。樂。る。快。召。ね。と。仰。よ。恁。と。喚。續。の。賓。を。む。く。余
立。浪。や。御。の。襖。戸。引。開。て。稻。戸。津。衛。由。充。が。生。平。お。替。り。出。仕。の。礼。服。肩。衣。袴。の。飛。驥。信
濃。越。後。お。名。高。良。智。の。入。品。年。の。齡。八。百。日。也。く。そ。ざ。の。上。と。六。七。ツ。ハ。の。土。圭。の。間。と。過。ぎ。
お。前。遙。お。伺。候。せ。と。美。刀。自。招。を。近。づ。て。津。衛。お。襖。裏。吩。咐。く。お。莊。本。小。文。吾。と。誅。せ。一。次。
折。か。折。か。東。武。くる。兩。箇。の。婚。連。の。使。到。着。お。ま。倍。て。便。宜。氣。件。の。首。級。と。齋。と。遣。さ。

證人ゆりと。今まるまい。あんぎ。人ひと々ひと。かの各内覽見かのうみし。と真偽まことひをまちうまちう。あげゆる。と答こたへ。西箇にしきの首画しゆが。と誘さなわす。をうそうそをば。役差えきさ。寄よせれば。豊実とよみつ。大川莊介おおかわ じょうけつ。と牌付はいふる。と受取うけとり。と。御武ごぶ。小文吾こぶんご。の首函引しゆかんいん。を共侶きょうりよ。益ますと搔か。遣や。左見右見さみみ。寔是まことれ。是れ記憶きおく。あ。那莊介なじょうけつ。ふ疑ひ。と。句。是れ正まことに。と。犬田小文吾いぬた こぶんご。句。眉毛鼻まゆら 鼻。梁年歲りょうねい。ま。句。曩襄なむくら。史し。と。此こ。も違たが。と。句。畔五郎殿はんごろうでん。句。蠅六殿えいろくでん。句。御邊ごへん。も。句。咱們ざなわら。も。句。鑒定けんてう。句。錯認さくにん。され。も。同是とうぜい。證據ちゆうぐ。よ。と。這これ。们ら。所持そし。東西とうざい。あら。東武とうぶ。還もど。と。披露ひろう。折おり。よ。よ便宜びんぎ。と。向むか。へ。由充箇ゆうくわ。袂包めくわく。と。然しか。莊介じょうけつ。も。小文吾こぶんご。單身逆旅だんじんぎょり。そ。あり。と。包裏ほうり。ひ。有あ。や。あ。や。知し。う。ね。と。余よ。所望しょぼう。の。あ。う。ん。狹せまい。と。島しま。よ。よ。と。推すゝ。と。携たぐ。と。則そ。他た。们ら。が。兩刀りょうとう。且よ。丈じよ。と。拿な。取と。よ。遞よ。與よ。を。受取うけとり。と。豊实とよみつ。御武ごぶ。也。付方紙つけかたし。小牌こばい。と。夕ゆふ。送おくり。彼かれ。些すこ。取と。と。夕ゆふ。共侶きょうりよ。銀ぎん。と。約半晌よほんじょう。御武ごぶ。也。腰こし。鳴なまく。と。奇き。多た。か。と。這これ。大川莊介おおかわ じょうけつ。と。牌はい。よ。寫か。され。兩刀りょうとう。寡わざわざ。君きみ。自じ。潛せん。の。秘藏ひざま。を。あ。小條落葉こじょうらくよう。の。大小刀だいおうとう。ふ。表装寸尺ひょうそうすんしゃく。些すこ。も。違たが。と。今いまより。十七八年じゅうしち八年。の。昔むかし。

身。寛正六年の冬十一月粟飯原首胤度が安龍山逸東太より斬られ折る中途に盜見あり。やまとさきもをさきあらた まとううみうち。あるとて そく。あらとて そく。さて
嵐山の尺八と小篠落葉の両刀を奪去されとゆえり。當年は某の十四五歳を冬として童扈従であるれば這両口の名刀を幾番となく目もやらずもやも觸ふるゝあれが今に至り忘るゝ事無。従であります。このをさきあらかじめ まとううみうち けさうどん もの。
但刀尖は此の疵あり。あの爰の記憶にひども。這小篠落葉の両刀は千葉家相傳の東西史あらず。寛正五年の比もあらず。件の粟飯原胤度が鎌倉守使せし折那地を購求めて寡き君はあらず。これまた人を砍るゝを。秋葉を下す木の葉をさきあら壁言がなむをあらむ。ぬ まとう あらきらう。 ひと
那村兩の名刀の抜けある刀尖より水氣出るとひよ飲れが小篠落葉と名けらる。小篠の則刀齋。是金の雪筋あり落葉へ件の奇特ふられどり人をひどく鋒とぞする。されば奇特の
又安定する。その他へ證迹分明あり。額藏の狂介。這両刀を竊取る。那盜賊の子なり。
あらん。首級と共に賜。そ石瀧殿。自瀧。ふまわしき。ゆき感悦あり。ふと看ぐをとあつたと
を來歴を演説。と上坐あらち對ひ。ちびびと稟を。豊実も亦小文五郎の両刀を食我抗て。

類の奪取と欲する。是より旅料を。但用心は如手。からく傷を負ふ。豊実
郷武眼を睁りてその裏へ心安る。縦同類のゆ知り。跟覗か。俺们兩人を合して
守護做。免へ。あをもく。指でもあきらか。とふと由充推返して。そぞの説ひを盛夏の
例へれど。成人の隙うと。鄙語ゆひ。倘恩意よゆる。各位の具足櫂。鎧の胴
首級の小瓶。重匣。後者を持ち。詎う。莊介小文吾の頬を。と知り。あを。免
未然の禍。防ぐ用心を。それで豊実郷武は有理と。免と余氣。俺们も亦憇矣。
とよひかとも。まごひで。助言を受ふ。似れど。左も右も仕らん。然の苦勞は。と輸惜と
を不減。而元ハ争ひ。又大刀自又宣を。畔五郎も蠍六郎も。御嬢者の使者を。首
級。大刀も願ひ。隨意遞与して。還。免と。けふある處を。一個の副使を。立され。俱
東武遣へ。壻君連の。返荅。每。便宜を。賢慮の。と向ませ。大刀自
來。それ。と。あらま。五郎。屢領を。厥を。免よろ。什麼詎と。遣。免。甲うちと向れる。由充頭を傾げ。此彼と

擇。免よ。臣隸を。秋野井二郎宣かん。他に甚介小文吾が旅宿ふ。卦た詫
計り。ねく表つるゆひ。那顛末と。具み知れり。然び大塚石濱ふ。問せぬ。と。折
免答ふ。未矣。且。津衛グ妻の弟へ。と。夢て。ある。秋深。あらを。免
三郎ハ執事隸の若黨免。津衛。と。宣せ。大刀自又領。現。秋野井
免。副使にて遣。翌日未明。首途の準備を。怠。却。豊実と御
院。さく。歸東の暇。免。食共。侶の言葉。うち連立。退。出。り。

第十九回 家廟の齋へ良臣異刀を返す

話表石龜屋次園太。小文吾。莊介の三天士の片貝。招待せられ。饗食。忘賞。祿然。心
あん。と。思ふ。よそ。懇意。一。日。二。日。と。壁。程。忽。地。風。声。耳。入。そ。那。三天士。の。夜。丈。執事
由充の宿所。許。の。力。士。捕。既。禁。獄。報。の。ま。あ。六。駭。

ト。大塚と遺きと稱ひを况親り對面。夢も許されば叶へば。次圖太竜は術計竭り。獨頻
アモ隻燥の三。身も似旨屬と経たる。六月の某の日。那天下士の首と刎り折る武藏
大塚と右瀆より來る兩個のを使。丁田畔五郎豊実馬加蠅六郎郷武と喚做を貪ふ輒
事の若黨秋野井二郎と副られて件の首級と大石半葉の兩家へ贈送す。とて丁田
馬加の萩野井と共に居す。まの片見を辞一去て既歸東より赴役と報ずる。アリケ。次圖
太駒馬背うち數死。然すゆても那二天士の其難智男力心術を。世よ又儔身を。後傑と
覺る。功あり。賞と。賸領主の娘者。の與よ。舊罪科られども。雙刃と首刎られ。
片貝殿の死計。執念深に女侯の僻事。好。速莫兩所の使者の迹と。跟趕蒐て。空を
首級を奪取て。死後恥辱と。雪ぎ。備豈灰者と。られ。要てあれと。深念。下士夫三
卿。之に發名。腹心の壯校と。猛可よ聚合謀。令て大塚右瀆両所の使者の去向を
尋ね。趕撃す。首級を奪すと。議す。程よ忽地障る。空で來て。本日を空を消せ。と。

既而二月後れ。且火家の異同ある。衆議亦一決せり。ケ密謀章本整ひ。案
事似むかけ。宗下某生再説。稻戸津衛由充。大石半兵衛。兩家の使者の萩野井三
郎連立て。伴當として東路へ辞去。その夜サ志念を。あれども。妻子も奴婢も皆
眠らず。獨家廟より籠居。更闌まで看経の声。肅然よびえり。抑由充は家廟下
壇。一方一间の板席あり。又その下に土窖也。深六尺。許程べ。重蓋とて造り。此も水
氣入る。あると急火災あらん。佛器を斂る爲め。生平より所すあれが外も
安らぎゆ。妻子の外。奴婢们だ。あれと知らぬ稀なり。間詰休題。然ば由充は昼夜
艾丑の比及。園宅のより。成熟睡をるを覗知。竊よ舟の板席を。抵抗不除ひ。是
梱と不と敵不く。暗蹄を。土窖より。階子と登り。推續を。両固の壯校也。是
則別人多し。大川莊不義任と。大田小文吾。悌順と。看官。莊。小文吾。既か死刑。既
首級。東武へ齋せし。今又道里ある人あり。そとあを。原も。由充は初。這丈も

由充が辞をもてて歸て國六穴八と獄舎より牽出で。即便頭を刎てけり。只その機密を
知るるのみ。若黨萩野井三郎と腹心の老兵们西行名ふ過されむ。ムホモト誓書を寫
て緊く口と鉗へ。後々其も洩ざけり。然けれども由充は那豊実と御武を疑ひ
あらん歟。と此ふと莊介示文吾が両刀と添て実檢の備へよ。豈憶んや。莊介を署
刀。昔年栗飯原胤度が笠置山縁連み數あれ折並四郎と船重が馬加大記の密意
宣して奪畠各て逃亡な。小篠落葉の名刀へ又小文吾が帶る刀が庚申塚の法場也。
翁久代も。犬飼現八分捕を。簸上社平が大刀を。現八丸を。莊介與へ。お莊介親の記事
雪絛の刀。葉の西刀。小篠落葉。庄介示文吾の。小篠落葉。庄介示文吾。小集
表。又茶芽山を立退く折信乃亦これを小文吾が贈與。テイ。小文吾これと腰不放
ま。その身を搦捕られ。夜艾。庄介が両刀と共に由充のを。落て。辯の。ふ及づ。然と云
知ら。豊実。御武も件の刀を各記憶あると。此の狐疑の心。那假首級を真と

き。お鑒定不誇ア。由充が謀る所十二分を行て。大川大田の西勇士が萬死と出で
生。保らて這首を躲れども。お由充が賢を愛へ。竊ふを君の非と補ひる誠心の致時
間。お由充は豪。由充が初より家廟供奉。茶頭飯菜及衣物の果子を。日毎お寄内へ
餽下す。と二天士と類ひ。莊介も小文吾も。二十餘日不及み。餓をとみる。口に這勦のを
食ふ。土窖裏席と裏布て火盤。茶器。炭。折袋。密。餽。二天士は稍
久く。市ふ在て地氣を受。余も盛暑者の折れ。半中へ倒清涼毛。暑者熱と忘可れ
些も恙あり。安らう不身を看。おは是作者の自注也。莊介小文吾が死。復世ふ
見。福凶吉。説くと都て右の如。看官善惡應報の違う。とあひ。間話已訖。紹
前説。莊介小文吾。俱か窖内より安。由充もうち對ひ。舍藏の恩再生の歌びと演
ぶ。由充声と密。假首級の。豊実御武が。支那條の首尾箇様々と送もしく説
考。今にも心安れ。大石千葉家の兩東使。鎧櫻。首級を藏。不曉。立去る。

去向へ信濃路を。御邊門も潜んで快投を。赴きて抑今番某が。秘計の御邊門の
與の主を。俺が老夫人の元辟事と。竊かあよ補ひ。幸かに勇士を殺す。と逆をすうて。
昔者唐山東海の孝女如翁。冤枉を誅戮せられ。三稔旱魃の祟あつ然びて。お賢を
冤げ。吉幸を殺す。天神地祇。俱よ怒そちの國よ禍を降す。和漢は先蹟最良。今
少數を。お達を。其が這矢を。集ふと。竊み御邊門を救ひ。知る他余厚く。主
君の忠を。後世評す。れもある。然れど由充を知る。ものまことに。是賢を冤せ
若殺すと。君の過と補め。忠と。義と。是其職分。私と。行を。公道を
喪ゆ。余は疑惑の一條ある。大田生の腰刀。大石殿の家臣す。簾上社平。大刀す。丁
田畔五郎豊実。認を。恁々とのへる。そハ那社平を。轂され。折分。捕を。ふわす。と。猜は。云
猜せ。かる。大川生の西刀。昔年千葉の家臣。走え。栗飯原首胤度。笠山逸東太。為
枉死の折。盜見。あそ。竊去る。自胤主の秘藏の副佩。小猿落葉と名け。れる。方大小の刀を。存

より。又是馬加蠅六郎御武。が。認。と。お來歴と。正可。勿論。重代の東西。あ。今よ
十八九年。己前。胤度が。鎌倉を。購求。を。自胤。まるで。セト。よ。ち。ま。も。ひ。寒。大川生の。そ。を。家
あ。今。寒。腰。ふ。跨。い。と。什。麼。傳。來。あ。ま。不。と。同。れ。庄。入。き。し。晚。生。西。刀。父。大川衛
士則。往。が。記。父。則。伊豆人。毛堀越御所の。莊官。す。と。諫。書。と。せ。か。る。が。ん。咎。よ。ろ。自。殺
す。軀。て。家財。と。籍。ら。れ。當日。役。官。せ。れ。と。そ。の。折。件。の。西。刀。も。那。籍。に。中。す。あ。そ。官。物。
き。あ。そ。余。後。安。の。ひ。れ。と。小。耳。を。留。そ。記。憶。ち。父。が。枉。死。へ。晚。生。五。六。歳。の。時。す。と。七。才
よ。け。冬。の。比。母。の。旅。宿。よ。世。を。去。す。晚。生。大。塚。す。莊。官。墓。六。の。小。廬。す。せ。れ。年。来。那
家。庄。へ。う。よ。そ。東。人。墓。六。丈。婦。の。仇。る。簸。上。宮。六。と。轂。す。果。せ。よ。と。禁。獄。せ。れ。首。と。刎
ら。鐵。き。けれ。大。塚。信。乃。成。孝。が。晚。生。を。讓。れ。西。刀。父。の。迷。愛。也。寸。尺。表。社。衣。家。の。紋。刀
尖。ふ。些。の。痴。あ。り。迄。豫。す。か。違。ね。が。飲。ひ。受。て。五。个。年。来。一。日。も。腰。ふ。跨。む。と。あ。回。傳

來へ這大田こそ知られ。うなづき傍そぞれが文吾も亦腰を找せ。執事せぬひが。六七个年
已前。小生舊里ある。時坊賈のゆき十五金。購ひて兩刀あり。と親の意ふ稱ひ。を
係る秘措。大塚犬飼が流寓。値偶せ。折より兩刀。牛と信乃贈り。あら。余後又大塚
犬川も贈つる。辯の趣の方縁。莊介の話説。要分明。うべ。莊介沈吟。と此彼坐。令主
は。晚生が父の送刀。昔年没官せられ。後堀越の御所滅亡の折。何人の手に傳ひ。鎌
倉より到り。粟飯原首が購。亦や。主君。まわせざる。余後首が枉死の折。其首が鎌
賊あり。竊々人を售けん。爰此彼と傳え。行徳。劉り。大界。購得。資財雜具。不
常の主。賣るもの。買ひ。わちて。傍そて。又故の王。還ら。往々。往々。足らず。世
欲と迭代。説示。由元の耳と澄て。ゆく。正約半晌。を。口。嘗。感嘆。而。通微妙。刀の傳
來。疑惑。あふ。冰解せ。それも。優て一奇事。俺。本貫も。亦伊豆也。親則堀越殿
政知。ふ仕へ。うめ。されば。大川生の先君子。とその父の疎。某弱冠。亨。比。衛士大
司。歎。ふ。

人ふ從ひ。文學を受武藝を。做ひ。師弟の恩義。亦深。加以。某が。年十七八。争
比。繼母の詭。ふ。より。父ふ。遂れ。親族許。寓居せ。ある。あ。折より。衛士大人。父を諫め。母と和
諭。て召返さ。め。然。徳。謂の君子。あ。惜ひ。一。星雲君の非法。不。身と措難。そ
ひ。お。か。や。竟。お。刃。ふ。伏。ゆ。そ。の。折。よ。某。へ。親の喪。よ。笠。居。り。一。空。居。す。裏。表。す。一。壁。の。力。と。盡。さ。で
空。不。過。くる。尔後。も。又。後室。御。母。子。の。施。御。へ。起。立。す。ひ。折。亦。俺。繼母。ひ。多。そ。夏。寝。す。す。す。
比。然。あ。を。で。人。傍。ふ。程。経。て。少。て。最。大。送。憾。く。思。ひ。く。も。往。方。を。表。ね。せ。ま。む。歎
弥。倍。君。家。の。断。絶。政。知。亡。き。の。が。某。们。も。亦。流。浪。し。く。此。の。由。縁。を。心。當。ふ。這。地。ふ
来。夕。ひ。よ。浅。に。文學。武藝。と。あ。長。尾。殿。ふ。仕。よ。う。漸。々。不。登。揚。某。れ。老。夫。人。ふ。隸
られ。う。愁。舊。縁。あ。う。世。不。同。苗。字。の。人。え。けれ。大。川。生。と。衛。士。大。人。の。獨。子。あ。う。の。早
さ。と。き。あ。き。み。だ。暁。尼。又。那。刀。を。て。る。こ。へ。ど。許。ヨ。の。年。を。歷。す。日。暮。が。如。ひ。で。去。え。あ。れ。と。政。良。尚。義。の
兩。男。士。の。冤。枉。を。憐。ひ。為。心。と。畫。平。く。そ。の。死。を。救。り。誠。則。ボ。ギ。と。俺。が。師。不。返。を。舊。恩

舊義素懷ふ愜ふ不勝の歎び察ゆ。と耳ひひの橋りくをふ大川よ深き情の渡津
衛遭て別々八百日ゆ。越の長濱長くぬ。天明見と惜しけり。莊介はほどと坐す。
坐ふ感涙の進む眼包を弄す。原来執事の拙父の弟子でせり。二親の世とおり
比才の寒暑を覺ゆ。あ弟子も朋友も少知るべからず。家はの刀來歴下ろ。
不測の執事は素生え。説諦されへ亡親再會見ゆ心地。舊故の情堪ぎ。然
は舊縁のやうも。執事の德誼の高を。唐山漢の高祖の時。季布羨く舍藏す。
竟も漢の良臣。做を朱家も優。錦の上に花と添る。心操を有。ざれ。晚生
倘幸ふ良主仕て。一軍の大将を奉り。料らを長尾殿と。鋒と交る。も。為ふ。子舎を退
く。伊豆や三嶋箱根權現。當國や。弥彦の神も捨去。照臨是れ。這義が背く。
しもと誓ふ勇士の心の誠ふ。小文五郎も亦感激。と。小生。只次因太と。俠者。是とぞ。
執事は眞の豪傑。折ふある。俺身き。初ふ倍く。馮くそひ。翁と。久由充

額を指て。二兄の賞美を分過だ。某のぞ。當らん。就て又一議。向も既示せ。如く。
各の両刀ハ首級不添て。老夫人の実檢不備。ハ那豊寒と御武が傳來を演證据す
あ。賜りて。或處。只返され。大田生の中刀を。這里。在り。大川生の両刀も。是先
考の記。最も最惜く。此。象。世の常言。も。所藏の宝。身の差替。と。不。得失。皆
矣。時へと。諦め。千萬金の名刀。も。命不易。と。東西。ある。と。四口の刀を
取半。と。這ニ刀ハ新刃。も。鋭味。皆。見。願ふ。元と。受取。跨て。竊。立退。亦薄
義。ある。と。這一包。黄金十両。盤纏の。為。不。贈。ま。か。と。笑。納。ま。か。と。這他。其。預
置す。兩箇の行裝も。這。首。も。あ。あ。徐。身。装。して。曉。身。も。あ。入。門。戸。夜。中。不通。矣
。も。晩。七。鼓。よ。木。夾。束。入。も。安。も。と。易。る。木。夾。も。亦。這。首。も。留。別。の。盆。も。甲。夜。よ
り。も。竊。ユ。准。備。と。あ。酒。菜。ハ。も。復。遇。だ。別。價。ひ。寸。志。不。セ。と。久。や。も。や。み。匣。の。内
よ。盆。銚。子。両。五。種。の。鎗。も。共。取。半。て。潛。す。不。薦。わ。登。時。莊。不。小。文。五。郎。刀。を。受。え。



金と取らし送る曲を由元の心配の如き。寧本演説り。其介が又ひける事。貴教
ぞ那両刀へ親の記で以て。這身と俱不惜けぬ。既入を渡て。今度こそ。那刀を
あをまう。かへ。那両刀をどう復せ。便不就て。信刀を返す。まんとぞ。此れもあづふいふ。
金を賜るより。小文吾も亦。小生们ひも。裏の内。貯祿の盤費あり。且小
牛が腰刀。鞍上社平。大刀。惜む不足。東西。大川の刀と共に。贋物。せられぐ。
送恨。哀れむ。武運竭。又那刀の。もふ。金子へ推辞する。どふ。由元も
の。頭と左肩うち掉り。幽金の交へ。受す。も授す。も時宜。依る。介意。あそへ後々ま。
快らざ。かわん。枉て。あの役受。と。官薦。而已。天士竟不推辞。と。受戴
共。侶。行。裏。衣。被。め。懲。而。盃。遣。替。と。既。不。數。獻。及。奉。程。鷄。鳴。忽。地。曉。報。て
別。促。生。由。充。ハ。潛。と。立。縁。頬。ハ。隱。措。三。基。營。笠。二。雙。草。鞋。其。介。小。文。吾。ハ。遞。享
せ。か。二。天。士。も。感。佩。て。歎。び。述。別。を。告。て。両。刀。を。跨。行。裏。を。馱。ひ。存。一。縁。頬。ハ。立。草。

ト。ひもて。鞋の紐ひそ。締。ば。那木夾。右。不會。左。小菅笠。引。提。て。庭門。よ。共。坐。て。由元。ハ
ゐ。わ。れ。ん。く。ぶ。か。毒。く。ミ。キ。唯。々。憐。々。と。互。異。と。祝。と。目。送。り。ナ。リ。少。程。ハ。莊。介。小。文。吾。只。那。木。夾。を。と。二。ニ。城。戸。と。障。る
と。き。く。歩。ゆ。程。ハ。天。の。下。の。と。明。ふ。け。あ。ホ。至。マ。野。鳥。の。雀。籠。と。手。心。地。と。由。充。の。鴻。恩。德
義。と。且。感。ド。且。走。す。程。ハ。兩。人。窮。小。相。譚。争。稻。戸。執。事。の。慈。善。と。兩。個。の。頸。と。續。と。
と。も。武。士。さ。る。の。が。両。刀。と。仇。の。為。奪。れ。贓。物。も。と。れ。て。死。ま。う。お。努。ア。恥。辱。那。両。東。使
丁。豊。宣。実。馬。加。御。武。う。の。奴。き。の。朝。片。見。と。立。走。り。老。と。雪。れ。ば。只。一。宿。の。遲。速。今。夜。と。言
續。て。趕。鬼。る。途。を。遭。ぬ。と。や。あ。伴。當。共。ふ。擊。す。留。て。俺。们。が。両。刀。を。と。復。と。後。す。そ。甲
斐。の。石。木。赴。ぐ。れ。他。們。が。去。向。信。濃。路。る。ん。と。の。れ。と。も。あ。り。の。と。誘。い。そ。べ。い。そ。ぎ。を。示
合。と。餓。て。鷹。鳥。笠。鳥。セ。一。勢。ひ。そ。齊。一。走。壯。ま。が。玉。皇。汗。六。月。の。炎。食。者。の。撓。ぬ。氣。れ
早。わ。ち。の。日。大。道。三。十六。町。里。十五。六。里。と。飛。か。が。如。く。お。趕。う。け。話。分。兩。頭。信。濃。路。岐。嶮。高峰。の
雲。う。と。て。ゆ。く。ら。ん。人。と。か。う。李。旅。宿。ハ。幾。夜。勞。事。の。昔。と。今。語。續。を。ひ。傳。ア。夏。寒。を。諷。

訪の太廟風渡る。浮寐の鳥と尾と搗ら。羽も枯と世と不樂。世ふ棄あられ野巻
アの。這里よ兩個の乞兒あり。路の傍の塘隣の下木枝折薪く伏小屋。德家はぞ欽門
田の豪豪欲水草織做菰簾。茲屏風と食堂。現浅すをみの奥の父とも鳴笛をた木北
弓も食えぞ悟れる。那寒山子拾得よ似て非人よ知れ。乞正も年齡を
四十許。蘿袴の足すあくねど。故疾乎。一足跛う。と鎌倉蹇見を喰做。又一人少
年也。襪樓の夏衣麻欲生絹狹蟬の羽。素肌の衣通り。身の皮醜う。相
摸小猴子と號す。恁而這兩個の乞兒。這里と徂徠の旅客と諏訪の社と詣入の神
乞んと僕程か。這日も既往還稀矣。土旺半分の日午よ臥疲倦。と鎌倉蹇見を趁
壁うち敲だ。やよ嘯鄰の相摸小猴子よ。午おきり。不東西欲。一足やけふと朝よ。垂喜
と貰ひ。錢七文餅でも買そ。啖きぬ。足立べ例の如く。里へ後折憑む。とひが
猴子ハ點頭。をあらゆま。尚五六文挣ひ。召飯料ふ。足ぬ。你ハ全身肥満

脇脇て病氣もすく見え。腰の力ぬ甚ま。故に角力の怪我。狹蛭兒の神と祈り過せ
去祟欲と向々呵く。とちち笑へ。鎌倉蹇見は舌うち鳴うして。噫又打譁て騁る。よ
俺も初へ鎌倉也。泊を流せ。米町京。某申屋の小官人阿乳母日金奉で育う。懐き
走て。一丈。癖が失ね。商賣の精進物。う嫌ひ。十六七の春秋より。天磯がみ化粧阪雞
蛋の四角と月の骨。晦知室の嫖蕩遊樂。五箇口の庫布は傾くまで奢り。使ひ足
りて。彼此と一宿寄りの歇舟。先毎衝流まれ。磯も着毛山。拵。箱根で雲木志
な折。薄情。便毒。踏出。骨玉。勝みて長樞。と昇れ。瘡。とがま。歩ぬ。一足。姿の
錢も。金も憎れ。坐行乞兒。まうく。親の四訓。乞と。子で子。不や。だら。甲斐
を。あれ汗蟲汗ふ糾。身の垢脂。草津湯治のかさ。這里よ。閑居の山佳。伴
ある。書卷。薦。小猴子と俺と。只二名。経讀む。ま。事。がれ。心細げ。憐愍。と往來

袖ふ乞ふ行状にて件の如。却又和郎へひき事故ふ宿うとすをきふる。年ひ六。十有九
アモ十九文揮取ふきても賣かな。空止も醜く金を窟も磨きて美服被せ。入肉經紀宗
太ふをき。梅孺丸旅と處く。箱根で道姑王鞍馬で渡那王僧正坊でも辨慶でも観音
標致ともちき。然とて鮮せ奴龍陽より。口説ても情あらじ。糠子釘。さうと氣よ素
生の奈何と向べ小猴子の冷笑ひ。你も輕充口不ど足が達者である。男子一死多き。可
戀多情世。険布のむし食え竹柱。狗兒の産室より異く。寐物語は身の懺悔ひ。益
哀れむ。落とひあひ。谷河の流れを共ふ飲む。暑者熱と凌ぐ相宿耶の一樹の蔭も他
生の縁。人ひ死ふかよ。而て七癖八歳見。痴積。九歳よりと少奉公。うち香ふ名も考
え。庵舊里。小原老。年期。猴子七初より。小錢竊三々買啖。使のゆき。湯のス。園子。弊
麸蠅。土薩摩芋。飯鮓。醴酒。柿密。柑大福。も。論健啖也。何でも四文を總購盡す。夜拾
舗。久常花生と。多氣。義理。欲動も。堺が高手。鬼を檣做ひ。日毎。東人。玉食。目視

鎧櫃の内より藏れて奴隸門を擔ぐ。且小篠落葉の兩刀と兵船上社平が舊刀は亦是黙要の
東西あれとて各その腰ふ跨ぐ。其身より腰又俱一弓若當軍持せり。まことに這豐実
と御武ハ姑息廷に小人そ功を負る癖あれば今番萩野井と副使せられ。俱ふ東
武へ赴く。心の内より然べど兩人竊謀合ひ。三郎と麻らうと他より先よ急速く帰る
にて主君主君の恩賞を預く。厚意計較わなければ。旅舎を三郎と共ふせば。約北陸中山道。
客店の坐席間數き。進むも止む。次ゆて他と交へ。日毎朝立と遅くして昇る
志駄て。夕食亦云ふ准じ。必日の暮れ。旅舎は詰て。秋野井三郎訝り。有一日
豊実御武が這吉支とひ出で。日今炎暑者の折。朝の每旅舎を出で。日午よそ休息を
ひ。遅く出で。日午も。總ひ急が。故ふ動え。伴當の大後りの見る。願ひ翠す。朝涼。
か。旅舎を出路といひて。亭午の比。伴當少。且總一か。とも。豊実。豈。和殿。その一と知り。
いき。も。と知りけ。今番は尋常。ま。逆旅。か。首級。と。ひ。這刀と云那同類。少知

ア。跡を蹻ひ。隙と覗ひ。本等畧んと欲す。と。れ。め。豆。飲料。が。する。然。と。未明。の。旅舎。を。出。る。が。
兵船。が。と。そ。や。す。あ。ふ。う。ま。ふ。い。と。あ。事。是盜賊。ふ。糧。と。齊。仇。少。刃。と。借。ふ。以。て。最。危。を。と。う。だ。や。島。許。す。人。ぞ。冷。笑。べ。三。郎。を。あ。れ。
あ。う。ん。火。を。そ。夕。日。と。す。と。遅。く。旅舎。不。就。身。す。と。這。吉。危。い。ひ。事。と。回。と。御。武。側。よ。そ。義
事。う。み。れ。あ。れ。み。ち。い。と。ま。せ。う。お。ま。さ。び。不。ど。信。濃。路。不。赴。そ。う。お。山。路。の。程。を。ア。ウ。シ。ウ。兵。部。と。
宿。投。ア。夜。伴。當。門。少。耳。下。ろ。次。日。の。毎。ゆ。あ。ぬ。晚。う。け。旅。舎。を。出。で。頻。り。ふ。呑。と。身。覺。を。
信。濃。路。不。赴。そ。う。お。山。路。の。程。を。ア。ウ。シ。ウ。兵。部。と。提。徑。の。三。走。り。一。ゲ。這。日。の。午。過。す。比。六。七。里。の。路。次。と。経。て。下。の。諏。訪。不。達。り。来。なり。り。
そ。ら。轟。る。轟。る。あ。つ。れ。い。だ。這。頭。ハ。順。路。を。出。る。晚。子。を。出。る。那。三。郎。ひ。う。ざ。知。る。底。是。よ。う。な。路。と。意。が。他。必

の趕着で一宿ハ後づ。諸士以上より俺们が執事隸の若黨と肩を比てゆれど。這
里まで來れど後安ろ。折しよ酷暑者の日午中。有數系々疲勞づるもあらず。且俺们が保當
の後れうぶヨリされば。雨夜時湖水の頭毛汗と納モもよられど。ち譚ひくやく程。東ノ湖
水に向ひる塘隄の頭。お茶屋あり。遮日。段簾を折続り。内ゆ外ゆ。発児ある
のミ。茶博士の召飯たゞ。宿所。やかうを。寂莫にて守る。豈れど。豊実も御武も却已
度。あらん。共侶不找入。発児。尻をうち樹。卉一湖水と眺め。這時。まよ後。至
老。傍へ來る。伴當。馬加の若黨と一領の鎧櫈を擔ぐる。奴隸。統。名のミ。這们。身
か。茶を汲みて。王。も。薦め。身を喫て。割笠を被じて。啖もある。當下。馬加。御武。跨
たる刀の柄を。拵て。丁田生。這名刀を何と。名む。ひめ日片貝殿の御前。也。某已。小宣
せ。如く。小條ハ。齋。小雪。小雪。落葉。け。刀。入。研。四下の樹葉。あらう。零る。事
と。或人の。ひ。也。這義の寡君千葉殿。も。知。召。ざ。る。事。無べ。本。是。虛実。と。試。然。居。奇特。

あらう。久。帰。ま。う。と。懲。と。稟。と。禱。感。頑。を。と。銘。物。の。易。く。も。う。と。狗。子。と。研。も
要。送。憾。に。は。這。支。の。ミ。と。と。豊。実。領。を。て。お。義。ハ。咱。們。も。願。一。け。灰。ふ。傳。聞。う。一。那
村。兩。の。刃。せ。ご。力。不。鮮。血。と。添。る。矣。樹。の。葉。が。零。ひ。と。名。刀。折。く。四。下。の。夏。樹。枝。這
里。の。老。る。椎。も。あ。れ。鋒。と。刀。交。ひ。の。不。可。と。の。う。遙。木。生。て。彼。御。臨。見。せ。と。馬。加。刀。祢。那
首。の。塘。隄。の。薦。屋。の。内。の。こ。ち。臥。方。乞。児。あ。る。他。們。も。素。う。好。人。す。と。做。志。一。積。惡。の
業。報。史。家。を。遂。れ。世。ふ。棄。れ。野。營。せ。う。と。き。つ。ら。考。ら。と。す。这。世。の。暇。と。取。ち。も
非。人。の。全。身。足。跛。う。と。と。不。良。も。骨。逞。く。肉。肥。え。ば。鋒。物。も。究。竟。と。彼。牽。出。せ。と。性。急
き。指。揮。よ。後。不。若。黨。奴。隸。が。業。り。ぬ。と。應。も。果。だ。皆。散。動。き。と。小。塘。隄。の。頭。へ。走。り
ゆ。から。薦。屋。推。倒。と。鎌。倉。塞。児。の。項。上。を。搔。扒。を。引。起。と。や。それ。非。人。奴。快。出。已。们
老。爺。の。御。用。あ。快。々。歩。と。諸。声。畠。最。の。奇。銳。罵。け。浩。怒。南。の。町。あ。稍。か。う。秀



相摸小猴子へ這為体と遙れて驚て走り逃げ。空竊歩を近着て椎の樹蔭下
闕窺う。少程不鎌倉賽見へまづ旅やく武士。伴當们ふと稠まれ。胆と淡
考戦慄れ。眼と瞬り声訣う。やぶ刀祿達懦り。甚多く御用候知らぬ。這景
犯せ一過ひふ。たゞ跛塞を一步も運びか。許させぬ。せめ果は大家ゆく
声ゆ立。坐行もあれ。无脚解虫でも。牛ドとひき。牛さと已んや。快々來よ。と左右より。
手を捉り腰と推す。宙吊る。茶店の頭へ。久松地と推居。登時馬加御
武。大刀の緒解く。解ふを。底野袴の稜祐三。落葉の刀を引提。豊実と共に
発児を放り立。出。佑と睨へ。底面兎も。向でも。も。居。役の準備。然とも。怡
あ。鎌倉賽見。兎已ふ身ふ添ひ。吐嗟と叫。平張。畢竟馬加御武。落
葉の刀を鉗え。否。そく亦次の巻の首。解分ふを聽候か。

里見八犬傳第八輯卷之二終

